

Kameda

2023.1 No.271

○ 巻頭言

LEADER'S VISION

年男・年女



脳を見る さわる

14 | 働くナースの日々の景色から

看護の目

16 | 亀田グループのニュースを知る

Close Up News

18 | 医療を支える部署をご紹介

病院は誰かの仕事でできている

○



次のステージへ

医療法人鉄蕉会 理事長 亀田隆明

明けましておめでとうございます。

中国武漢市からの帰国者を受け入れてから、本年1月29日でちょうど3年となります。当法人では、3年毎に中期経営計画を策定していますので、本年3月をもって2020年度～2022年度の中期経営計画が終了します。

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）との闘いに明け暮れたこの3年間を振り返りますと、経営的な中期経営計画は概ね達成されましたが、内容は当初私たちが想定したものとはまったく違うものとなりました。

WHOによるCOVID-19のパンデミック宣言にはじまり、世界的な隔離政策、たび重なる行動制限、新しい生活様式、加えてロシアとウクライナとではじまった戦争に因るエネルギーと物流の混乱、温室効果ガスによる気候変動で引き起こされる大規模災害、歯止めのかからない急激なインフレなど、これまで経験したことのない激変の3年間でした。

本来であれば既に2023年度～2025年度の中期経営計画の立案を終えていなければなりません、経済ばかりか働き方や生活スタイル、人々の価値観などあらゆるものが急激

に変化し続けている状況下では、今後の動向を慎重に見極めねばなりません。そのため中期経営計画は本年中の策定を目指すことといたします。

しかし混乱の中にあっても、次のステップへの準備は着実に進みました。耐震性に問題があるD棟の取り壊しを行うため新たに災害時の要となるG棟を完成させたほか、感染症対策を施した手術室の増設、診療科の世代交代、経営陣の強化など成長への基盤は確実に強化されました。

一方で、職員の待遇改善やポストコロナで厳しさを増す経営戦略など、多くの課題も抱えています。コロナ下の3年間、職員同士の懇親を深めることもままならず、バラバラになりかけた組織を、もう一度ワンチームとして強く結束させることはチーム医療を有機的に推進する上で欠かせない問題と考えます。今こそ患者さま中心の医療（Patient Centered Care）こそが亀田の理念であることを心に刻み、一人でも多くの生命、クオリティー・オブ・ライフの向上に貢献できるよう新しい世界を切り開いてゆきましょう。

亀田メディカルセンターの理念

私たちは、全ての人々の幸福に貢献するために
愛の心を持って常に最高水準の医療を提供し続けます

最も尊ぶこと：患者さまのためにすべてを優先して貢献すること

最も尊ぶ財産：職員全員とその間をつなぐ信頼と尊敬

最も尊ぶ精神：固定概念にとらわれないチャレンジ精神



前へ 前へ

亀田総合病院 病院長 亀田俊明

昨年もコロナに振り回された1年でしたが、災害時に力を発揮できるよう整備したG棟への引っ越しを滞りなく完了し、新たな透析室やリハビリテーション室も無事稼働することができました。さらには感染症対策を施した新手術室も春から運用を開始し、コロナ下における緊急手術に力を発揮しました。引き続きE棟の改修を進め、現在耐震問題を抱えているD棟からすべての機能を安全に移設し、これまで以上に職員が安心して患者さまのために働ける環境を整える所存です。

また今年は他の医療機関との連携強化を図り、予定入院の患者さまはもちろんのこと、救急患者さまもしっかり受け入れられるようベッドコントロール機能を強化します。さら

に、今後海外との交流を再開していく中で、円安を逆手に取りインバウンドも再強化し、より多くの外国人に鴨川市を知っていただき、地域経済の立て直しにも貢献したいと思っています。

新たな放射線治療機器も導入予定であり、これまで他院に紹介せざるを得なかった多発性脳腫瘍の治療も可能となります。これまでよりも遠方からお越しいただく来院者が多くなることも考慮し、レストランや駐車場周囲の整備を急ぐなど、より快適にお過ごしいただけるような取り組みも進めていこうと計画しています。

コロナを理由に歩みを止めることなく、一丸となって前進して参りましょう。



みんなで笑顔に

亀田クリニック 院長 黒田浩司

新年明けましておめでとうございます。「with コロナ」が見えてきました。立ち止まっていた3年間から今年は上に向かって大きく踏みだしてゆきましょう。

職員の皆様へ。クリニックが目指す物は何だったか。もう一度原点に返ってみましょう。「帰りは笑顔で」です。そのために、我々は最適な医療サービスを提供する。それによって職員も達成感に満ちて仕事を終えることができる。院内で働くスタッフも笑顔で帰れなければ、最適な医療提供は継続できないでしょう。5年、10年前に比して業務の質はかなり高度になっています。これまで各部署でそれぞれが工夫して最大限の「カイゼン」に取り

組んできていることは承知していますが、業務量も増えてきており、さらなる業務支援を必要としています。それを解決する手段として、これまで検討を進めてきているのが医療版DXといわれる手法です。今年は具体的に見える形で導入・設置に踏み切りたいと思います。

そしてこの巻頭言をお読みいただいたご来院の皆様へ。具体的に行列や待ち時間が減ったかどうか、電話予約は取りやすくなったか、など「亀田のカイゼン」を感じられたかどうか、至らぬ点がございましたら、ご遠慮なくフィードバックをくださいますよう、今年もよろしくお願い申し上げます。



開院20年目もルーティン

亀田リハビリテーション病院 病院長 永田 智子

亀田リハビリテーション病院は本年開院20年目を迎えます。介護保険制度と連動して新設された56床の病院は、世界的な建築家・安藤忠雄氏が手掛けた初の病院建築で、亀田総合病院健康保険組合の体育館施設と共生しています。

患者さまとともにリハビリテーションのプロフェッショナル達が機能回復を目指し、日常生活自立度・生活の質を高めるケアと医療が連動・協調して目標(ゴール)達成していくことが私共のルーティンです。開院以来、約5,200名余りの患者さまにご利用いただきました。

2005年にISO9001認証、2018年は回復期リハビリテーション単科病院として国内初のJCI認証を受けた当院の強みは、安全で質

の高い医療サービスの提供、亀田メディカルセンターとの医療連携です。2022年は超音波診断装置更新、機能的電気刺激装置(NESS H200)・嚥下内視鏡を新規導入、骨粗しょう症治療と口腔機能管理の充実を図るため亀田クリニック歯科センターとの連携基盤を整備しました。医学的管理、看護ケア、適切な栄養管理のもと、安全で標準的なリハビリテーション治療を安心して受けられるよう病院機能の充実を図っています。

患者さまに笑顔で帰っていただくために、全ての職員が心をひとつにして考え、挑戦し、変化に対応して行動することがルーティンです。本年もOne Teamでリハビリテーション治療を提供していきます。



開設10周年を迎え

亀田京橋クリニック 院長 岸本 誠司

亀田京橋クリニックは、2013年「東京でも亀田クオリティ」をモットーに開設され、今年で10周年を迎えます。その節目の年の目標について部門毎に述べます。

外来部門では、女性特有の疾患に対する新治療やリハビリ導入、手術など患者さまに合わせた高品質な診療の提供が目標です。

健診部門では、受診者さまの様々なニーズに応え多方面に渡る健康管理を目標としたオプション検査の充実化が目標です。

一昨年新設の亀田京橋スポーツ医科学センターでは、従来の術後リハビリに加え、医学的根拠に基づくフィットネスや企業の従業員の健康管理を経営的な視点から実践する「健康経営」に積極的に参画する計画です。

ところで、4年前に日本で行われたラグビーワールドカップで日本チームのスローガンは"One Team"でした。この言葉は広く拡がり、当クリニックでもこれをスローガンとしてスタッフ一同が一丸となって様々な改革に取り組んできました。今年の日本チームのスローガンは一步進んで"Our Team"で、全員が当事者意識を持って自分の役割を果そうというものです。クリニックにおいてもスタッフが積極的に問題解決に参画してもらえよう、良質な医療を提供し誇りを持って働くことのできる"Our Clinic"にすることが私の今年の目標です。



KFCTの2023年

亀田ファミリークリニック館山 院長 岡田 唯男

癸卯(みずのとう)の年は、これまでの努力が実を結び、勢いよく成長し飛躍するような年になると言われています。

亀田ファミリークリニック館山では、例に漏れずこの数年コロナ対応に追われていますが、それらも確実にこなしつつ平常業務に落とし込み、新しい取り組みにもチャレンジしていく予定です。地域の高齢化から、在宅訪問診療のニーズが増えており、それらに応えること、他の医療機関との連携、支援のさらなる強化、医療の質のさらに厳密なモニタリング、建物の老朽化対策に取り組めます。

当院の所在する館山市の他の医療機関と連携をおこなって、館山市、南房総市南部地域の医療を当地で完結することで、亀田総合病

院が医療資源の少ないいすみ地区からの患者引き受けの余地を担保できるよう、南からの負荷を減らすという貢献もおこなっています。

また家庭医療専門医育成の観点からは、引き続き専門医試験成績優秀者の輩出(過去5年連続入賞)、より多くの専攻医の採用と育成、学術の観点からは、さらに多くの論文の発表を目指していきます。



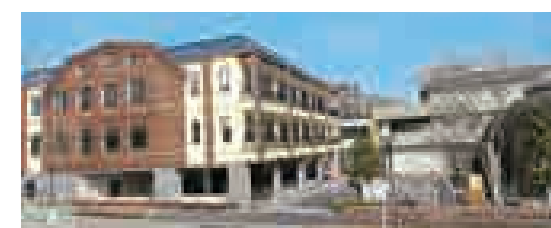
亀田森の里病院が2023年に取り組むべき課題

亀田森の里病院 病院長 高木 敦司

この3年間は、新型コロナウイルスの対応に追われる日々でした。感染症対策を優先に、通常診療との両立を図ることを主眼に診療を実践してきましたが、多くの困難がありました。幸いワクチン接種と治療薬の開発により、日常が戻りつつあると感じられます。

新型コロナウイルスの蔓延以前と比較して、取り組むべき課題を考えてみました。森の里周辺は、神奈川県においても高齢化率が高い地域です。この3年間で外来をしていて感じるのは、自立していた患者さまが、認知症やフレイル(虚弱)が進行して通院できなくなるケースが増えていることで、入院後の在宅復帰も低下傾向であり、療養型病院への転院件数も増えています。

健康寿命の維持のためには、健診や通所リハビリの充実も必要です。また、従来から重視してきた訪問診療や訪問看護との連携は、亀田森の里病院の強みでありますので、その連携の維持に注力していきたいと考えています。地域の患者さまのニーズに合った診療には、健全な経営状態の維持が不可欠ですので、職員が一丸となって収支の改善に取り組んで参りたいと思います。2023年もよろしくお願いたします。





2023年 新たな出発

亀田総合病院附属 幕張クリニック 院長 和田 亮一

中国のことわざに『1年の繁栄を願うなら作物を育てよ。10年の繁栄を願うなら木を植えよ。100年の繁栄を願うなら人を育てよ』という伝えがある。日本女子スピードスケート界の第一人者小平奈緒選手は2022年10月22日の全日本距離別選手権で優勝して現役を退いた。今も世界で勝てる力がありながら。彼女の座右の銘は『明日死ぬかのように生きよ、永遠に生きるかのように学べ』マハトマ・ガンジーの言葉だという。

私たちは医療という仕事にたずさわっています。健康は幸福の大事な要素で、幕張事業部は人間ドックを中心に事業展開しています。「人間ドック」という言葉はどこから生

まれたのでしょうか。きっと造船所から思い浮かべたのだと思います。人生の荒波にもまれても大丈夫ですよと健康を保証して送り出す。何かあっても心配はないですよ。医療は人々に大丈夫だと寄り添い勇気づける仕事だと思います。

2023年からの中長期計画、原点となるのは『心をつかおう・ベストでいこう・チャレンジしよう』です。開設して32年目になります。幸いにも受診された方より感謝や励ましの言葉を数多くいただいて参りました。幕張でドック・検診・外来診療を希望されるすべての方を迎えられる、そんなクリニックを職員一人ひとりと創っていききたいと思います。



早期発見・早期治療

亀田MTGクリニック 院長 橋本 拓平

当クリニックでは消化器内科、婦人科、ウロギネ科、おつうじ外来診療を専門の先生にご担当頂きながら、私自身はエグゼクティブドックの内視鏡検査に直接関わっています。

コロナ禍の影響による受診控えは人間ドックの世界にも及んでいます。元々健康でいらっしゃる方が多く、検査間隔があいても大事には至らないことがほとんどなのですが、この3年間で「もう少し前に受診頂けていれば」という例も出てきています。

ドックでご自身にどんなリスクがあるのかを認識頂き、オーダーメイドな検査オプションのご提案をさらに充実させていきます。「消化管疾患リスクは低い」ため内視鏡検査の間隔

は少し空けられるも、血管疾患リスクが高いため循環器系の検査をこまめに行うのがいい」といった具合です。

年齢によって違いはありますが、悪化しやすいポリープ(腺腫)の出来やすい大腸粘膜を有した方は3割程度いらっしゃいます。ただし自覚症状はなく、大腸を内視鏡で一度直接見ないと分かりません。現在の医学ではここまでする限界であり当院でも行えていませんが、遺伝子検査や人工知能と組み合わせ、より適切な検査間隔をご提示できる将来がもう間もなくです。当院人間ドックのご予約をお待ちしております。



プレコンセプションケアから難治不妊治療まで

亀田 IVF クリニック 幕張 院長 川井 清考

女性のライフステージや生活環境に応じた包括的な支援と不妊予防に向けた施策が政府により推し進められる中、当院では2022年より新たな取り組みとして「プレコンセプションケア(赤ちゃんを授かるために、妊娠前から男女ともに生活や健康に向き合い体を整えていくこと)」の検診を開始しました。人口動態統計(厚生労働省)によると、2021年に生まれた赤ちゃんの数は、過去最少の81万1,622人、合計特殊出生率(1人の女性が生涯産む子供の数)も1.3と減少、第1子出生時の母親の平均年齢は30.9歳と過去最高となりました。晩産化の進行は、2人目、3人目を考える選択肢が狭められることにもなります。

プレコンセプションケアの更なる推進は、2023年の重点課題の1つです。安心・安全で健やかな妊娠・出産と将来の子供たちの健

康のために、行政や企業とも協同し、正しい知識の普及啓発と検査を受けやすい環境整備に取り組んで参ります。

不妊治療は、体外受精の保険適用により、質の高い安全な医療が標準治療となっています。一方、保険・先進医療では救えない不育症・着床不全患者さまへの免疫治療の選択肢を増やしていくことも我々の使命と考えます。

テクノロジーの進化による劇的な変化の時代に私たちは生きていますが、新しい世界に飛び込んでゆくチャレンジ精神はまさに亀田イズム。子どもを持ちたいと思う多くの人の希望が叶えられるような生殖医療施設の実現こそが私たちが描く未来です。2023年も「私たちが達成できなかったら、誰が達成するのか?」という意思をもって未来を繋ぐ生殖医療に向き合っていきます。



年男・年女 年頭所懐

「年男と言われて」

亀田ファミリークリニック館山
家庭医診療科 山田啓文

日々の出来事に右往左往されながら、あっという間に月日経っている今日この頃。年男と言われて、ふと、これまでに振り返ることができました。

回り年に自分が何をしていたのかを思い起こすと、広島で従兄弟と過ごした赤ん坊時代、思っていた中学には入れなかったものの友達同士では仲良くやれていた中学時代、失った青春時代を取り戻すように過ごした大学時代、と自分を形作ってきた日々が思い起こされました。

その時その時は全力で生きていたし、起こった出来事や周りの人を決して忘れることはないと思っていましたが、振り返ってみると意外と忘れていたものなのだなと、悲しいやら、嬉しいやら不思議な気分です。継続的に関わり続ける人以外は段々と記憶の片隅に消えていく、そんなものなんですかね。忘れたくない人は誰なのだろう、忘れたくないことは何なのだろう。時折、ふと、立ち止まり自分の進むべき道を探ってもいいのかも知れません。

いいことも嫌なことも、捉え方次第で変わることも、様々なことがあります。最期に振り返った時に誰かに語りたくないような人生を歩めるように今後も精進していこうと思います。

「4回目の年男を迎え人生を振り返る」

亀田総合病院
画像診断室 副室長 佐藤和彦

朝、海で波乗りしてからの仕事。夕方、仕事を終えてからの波乗り。そんな仕事と波乗りを両立して充実していた20代。

息子のソフトボールチームのコーチや部活の試合観戦など子供中心の生活で日に日に体重が増した30代。

人間ドックで脂肪肝が見つかり、仕事にも不整脈。ストレスと戦い続けている40代。

ストレス発散と運動不足解消のため夜勤明けと日・祝日はほぼ波乗りから1日が始まる。これが今の自分である。

こんな今の自分は後輩からみてどんな上司に見えているのだろう。そんなことをふと考えてしまう。自分が20代の時、先輩や上司に対して『やっぱりすごいな!! あんな先輩のように自分にはなれるかな』、そんなことを考えていた。今、自分はそんな先輩に近づけているのだろうか? 画像センターの一員として早27年。今年で48歳になる自分。気づけばあの時の先輩の年齢を超え、いまや副室長という立場にいる。

去年は人員不足とコロナで多忙だった毎日。今年は多忙であっても職場がいつも笑顔にあふれる働きやすい環境になるよう努力し、その中で画像センターのみんながさらに成長することを願う。自分はいままで学んだ知識やスキルをできるだけ後輩に伝えていけたらと思う。

「うさぎと亀田と私」

亀田京橋クリニック
看護室 中野かおる

今ではすっかり歳を聞かれることもなくなってしまい、普段は殆ど自分の年齢や干支を意識することはありませんが、卯年の2023年、年女 の原稿依頼が来るような予感がありました。

2023年は亀田京橋クリニックも10歳、私自身も亀田へ転職して10年という節目の年になります。10年前、私は亀田京橋クリニック開院初期メンバーとして、鴨川で研修を受けた後、京橋でボールペン1本、付箋紙1枚、準備するところからスタートしました。開院初期メンバーという響きはとても誇らしく、亀田京橋クリニック誕生の瞬間に立ち会えたことは私にとって貴重な学びとなりました。あれから月日は流れ、人間ドックの受診者さまや外来の患者さま、スタッフの人数も増え、それに伴う様々な経年変化も現在進行中です。

さて今回のタイトルに引用したうさぎと亀の物語ですが、私も亀のように一步一步、コツコツと前進しつつ、時には自分の干支でもあるうさぎのような猛ダッシュやちょっと長めの休息も取りながら、後半の人生も穏やかに面白く過ごしていけたらと思います。そして人生を如何に健康で過ごせるか、食事や運動面における人々へのサポートを私の使命として、引き続き2023年も取り組んで参ります。



「60歳」

亀田総合病院
看護部 B3精神科病棟 師長 植松ヒロ子

4回目の年女ということで、今回のレポートの依頼があり、60歳を考える時間ができました。

私は、仕事をするのが好きだと思います。そして、今までの仕事を通してかかわる人々にとても恵まれていたと思います。

仕事は、生まれて自分を自覚したときから、小学生から高校生、看護学生から看護師、看護主任、看護師長です。新しい仕事の数か月間の逃げ腰気分や不安気分は、いつものことです。この時期は自分との闘いです。つぎの段階は、その仕事を達成するためにひたすら格闘します。格闘しているときもいい感じですが、格闘が終わるころのすがすがしさが心地よいものです。時に挫折感もありました。そんなときは一人で、何が自分にとって一番よいことかについて考えたものです。

また、その時々の方々が、私のわがままだったり、身勝手だったり、受け流してくださり、受け入れてくださっていたということです。いまでご指導くださった方々の笑顔や、その時の場面がセピア色に彩られて、とても懐かしく、優しい気持ちになりました。同僚・先輩・上司の方々に、とても、恵まれていたのだ、と納得します。

私は仕事を通して、自分が自分らしく存在していることを感じ、人生を楽しんできたわけだ、と納得しました。

レポートを書き上げるまでの時間が、自分の人生を考える時間になり、自分理解にたどりついたという、成果を導き出したこととなります。よい時間をいただいたことに、心から感謝を申し上げます。



顕微鏡から外視鏡へ

近年の脳神経外科の手術は、手術用光学顕微鏡を用いるのが一般的だ。術者は接眼レンズをのぞき込み、周囲のスタッフが術者やバイタルに目を配る。顕微鏡を向ける方向によっては術者が首を曲げたり、両腕を伸ばしながら手術をすることもある。顕微鏡を操作する医師にとって、身体的負担が大きい。

昨年6月、当院で初となる外視鏡を用いた脳神経外科手術が行われた。術者はペットボトルほどの小型のカメラを操りながら、姿勢を崩さぬまま手術を行っている。3Dゴーグルを装着した全員の視線は大きな4Kモニターに注がれている。モニターの画像は裸眼ではぼやけて見えるが、ゴーグルを通した目には立体的に映る。

「これまでの手術は、医師と顕微鏡が一体となっていて、顕微鏡と一緒に医師が動かなければなりません。外視鏡はカメラを動かすだけで、医師はそのままの姿勢でいられます。またカメラ自体が小さいので術野を邪魔しないこと、広く手術空間を確保できること、顔をまっすぐ前に向けた、いわゆるヘッドアップ姿勢でいられることなど、術者の負担がだいぶ軽減しています」と渡邊医師は言う。

小回りの利く外視鏡は患者にとっても利点がある。これまで手術にあわせて患者を横にしたり、うつぶせに近い格好にし

たり、体を持ち上げることもあった。そのため、術後に痛みを訴えるケースもあった。外視鏡はカメラのほう自在に動くため、患者にとっても比較的負担の少ない体位で手術を行うことができる。

Made in Japanの4K3D技術

外視鏡を語る上で欠かせないのが、4K3D技術である。脳神経外科手術では、非常に細かな神経や血管などを大きく拡大しつつ、手術がしやすいように立体的に映し出す必要がある。顕微鏡は二つの軸をずらした接眼レンズで立体に見ることができるが、外視鏡を映すモニターはそのままでは立体に見ることができない。偏光グラスをかけることで立体像を結ぶ。3D映画と同じ仕組みだ。

当院で採用したORBEYE（オーブアイ）は医療機器メーカーのオリンパス株式会社がカメラを、モニターをソニー株式会社が開発した。「4K3Dは顕微鏡を超える画質だと感じます。日本メーカーが作ったMade in Japanの技術です」と渡邊医師。

今後の主流は…

近年、外視鏡を導入したと発表している病院も多い。従来の顕微鏡にとって代わる技術となりうるのだろうか。「導入したという病院も、顕微鏡をスタンバイさせているところが多いよう



です。難しい箇所は慣れている顕微鏡で、という先生もいます」と渡邊医師。一方で比較的若い医師を中心に、外視鏡に関する学会発表が年々増えており、今後主流となっていくように感じている。

しかし「顕微鏡に慣れ、達人の域に達した先生方がわざわざ外視鏡に移行する必要はまったくないと。外視鏡の大きな特長であるヘッドアップの姿勢も、医師によっては「頭を上げるより、顕微鏡をじっと見ているほうが集中できる」との感想もあるそうだ。

ただ外視鏡にもデメリットはある。顕微鏡下の手術では手の操作軸と視軸がずれていない。つまり見えている範囲外への注意は少なくてもよい。一方で外視鏡は、あらゆる角度からカメラを入れられるため、手の操作軸と視軸が異なる場合がある。そのため見えていないところで器具が脳に負担をかけていないかなどを注意する必要がある。また、内視鏡操作に慣れている医師はモニターを見る手術に対し比較的抵抗が少ないが、慣れない医師は違和感を覚えることもある。

人体を傷つけることなく、体の中を見ることができたらどんなにいいだろう——。医療の発展は常に画像技術の進歩とともにあった。今回は脳神経外科の渡邊信之部長代理に、脳神経外科手術で使う最新の「見る」ための外視鏡のほか、「さわる」を実現した3Dモデルについて話を伺った。



手術室の一体感

外視鏡は「当院をより魅力的にするという効果が大きい」と渡邊医師は言う。患者にとってより安全な手術ができることはもちろんだが、若手医師に「外視鏡のトレーニングもできる亀田で働きたい」と思ってもらえるからだ。さらに教育面で言うと、モニターの存在も非常に大きいと感じている。「若手の医師をはじめ、手術室スタッフ全員で同じ画面を見ることができるのが外視鏡の特長です。術者教育はもちろん、看護師も術野を見ながら器械出しができることは大き

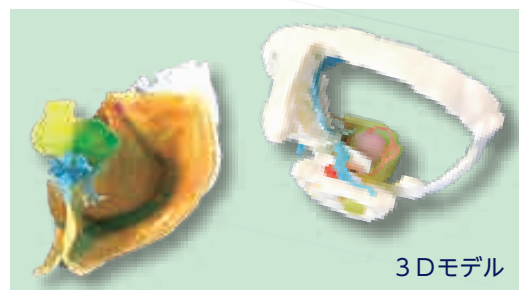
いと思います。これまでも顕微鏡の小さなモニターはありましたが、55インチの大型モニターを全員で見ることができることの意味は大きいと思います」。

3Dモデルで“見る”その先へ

渡邊医師が当院に着任する以前から取り組んできたのが、3D printed modelを用いた手術シミュレーション・トレーニング(通称3Dモデル)の普及だ。MRI・CTなどのデータから手術に関わる脳の部分を3Dプリンタで造形し、手術のシミュレーションやトレーニングに役立て

るというものだ。近年医療への応用も注目される3Dプリンタだが、その種類はピンキリだと渡邊医師は言う。「3Dプリンタは個人が持てる数万円のものから、数千万円するものまであります。3Dモデルで使用しているのは、後者になります」。

コラボしているのは米国ミネソタ州に本拠を構える3Dプリンタ専門メーカーのStratasys(ストラタシス)社だ。「他者の追従を許さない」と渡邊医師が太鼓判を押すストラタシスの3Dプリンタは、色をつけたり、部位ごとの硬さや質感までを本物そっくりに再現することができ、その技術があったからこそ3Dモデルが実現したという。脳の柔らかい部分や、骨の硬さまでを正確



3Dモデル

に再現し、実際の手術で使用する器具を用いてシミュレーションを行ったり、トレーニングをすることができる。「手術を体感できる」と渡邊医師は表現する。

広がる医工連携

医療に関わる新しい技術の研究や開発を、医療系大学と工学系大学が機関の壁を越えて行うことは「医工連携」と呼ばれている。22年10月に発表された国立大学法人東京工業大学と国立大学法人東京医科歯科大学の統合のニュースも記憶に新しい。

渡邊医師の出身校である東京慈恵会医科大学では10年以上前から「医工連携」による研究が進み、東京理科大学の大学院生や研究者が校内に常駐しているという。これまでも3Dプリンタで動脈瘤と血管を造形し、それをどのように治療するか戦略を立てる研究などが行われてきた。渡邊医師はその研究を、複雑で難易度が高い頭蓋底手術に応用したのだ。

頭蓋底腫瘍に挑む

頭蓋底腫瘍はその名の通り、脳の最も深部、頭の中心部に発生する腫瘍だ。頭蓋底腫瘍はそもそも患部に到達するまでが大変だと渡邊医師は言う。頭蓋骨を削り込むことで少しでも患部に近づき、腫瘍の周囲にある重要な血管や神経、脳を慎重に避けながら腫瘍を摘出する必要があ

る。例えば耳の後ろにある乳様突起という骨を削る。その中にも神経や三半規管などの重要構造物があり、それらを傷つけることなく手術を進めなければならない。少しの傷が後遺症を残してしまうかもしれないため、技術・経験・集中力・知識などあらゆるスキルが問われる。非常勤手術指導として勤務している渡邊健太郎医師とともに難症例に対峙している。

では、頭蓋底腫瘍に挑む医師はどのようなトレーニングを行うのか。これまでは cadaver dissection、いわゆる献体を用いたトレーニングコースに参加するのが一般的だった。ただ参加費が非常に高額なうえ、倫理的な問題も関わり、当然ながら次に執刀する患者と状況が同一ではない。

熟練した医師ならば、画像から患部をイメージすることもできる。ただ経験の浅い医師にとって従来のやり方でその領域にたどり着くのは容易ではない。そこで渡邊医師が考えたのが、3Dモデルの活用だった。手術前に本番さながらの練習ができることに加え、先輩医師に手術の手術本を見せてもらったり、複数の術式の中でどれが最適かを選択することにも役立つ。昨年特許(特願 2021-155882)を出し、論文もアクセプトされたばかり。手ごたえを感じている。

また企業側からトレーニングツールの開発を一緒にしたいというオファーも受けた。トレー

ニングを経て安全な手術を行うことができる医師が増えれば、社会全体に貢献できると考えている。

画像から3D造形のためのデータ抽出の作業も「血管のつながり方を立体的に考えたり、臓器を少しずつ積み上げていくような作業で、2Dから3Dをイメージしやすくなる。それ自体がトレーニングになる」と渡邊医師。これまではなんととはなしに見ていた画像も、今ではすべて「3Dだったら」と考えて見るようになったそうだ。画像の解剖に詳しくなり、いずれは3Dモデルを使わずとも達人たちのように脳の奥深くを立体的にイメージできるようになるのではないかと期待している。

びびりだからこそ

落ち着いた語り口の渡邊医師だが自分のことを「慎重派のびびり」と表現する。難しい手術の前夜は緊張するそうだが、イメージができていないからこそその不安だと思っている。「どの医師も、画像を繰り返し見たり、過去の手術の動画を確認したり、教科書を読んだり、それぞれの方法で準備をしているのではないかと思います。3Dモデルは私にとって自信をつけるためのツールのひとつ」と渡邊医師。ツールが多くて損はない。びびりの自分だからこそ考えたことが、多くの医師の自信につながればよいと思っている。

外視鏡のメリット・デメリット

merit

- 術者の疲労軽減
- 広い手術空間の確保
- 内視鏡など他の機器との併用がしやすい
- セットアップ時間の短縮
- 移動の容易さ
- 患者にとって手術中の自然な体位

demerit

- 操作の慣れ
- 顕微鏡に慣れていると切り替えが難しい

看護の目



左から安田副部長、秋葉副部長、渡邊部長、池田副部長、神作副部長

現場力の向上が生む質の高い看護サービス

明けましておめでとうございます。

医療現場では新型コロナウイルス感染症との長い闘いが続いており、いつどのように収束していくのかが未だ見えない状況にあります。こうした中で新型コロナウイルス感染症への対応方法には個人差や組織差が生まれ、混沌とする中で仕事と生活を送るという非日常が続いています。

しかし、このような中であっても、看護部では、医療法人鉄蕉会2022年度重点目標に基づき2022年度看護部目標「環境変化に柔軟に対応できる人材育成を行い、質の高い看護サービス提供を行う」を掲げ、「有効な病床運用」「安心・安全な看護サービスの提供」「チーム医療の実践」「人材育成システムの充実」に向

けた取り組みを行ってきました。2022年11月に中間評価を行い、前年度同時期に比べてよい成果を得られていることがわかりました。

混沌とした中でも看護部が目標達成に向けて進むことができたのはなぜかを省みたところ、「現場力」を高めることの必要性和重要性を強く認識することとなりました。

経営コンサルタントとして知られる遠藤功氏は、現場力とは自律的問題解決能力であり、経営と現場が一体となって鍛えるものだ。また、出発点となるのは、現場で業務を担う一人ひとりの「高い意識とやる気」。次に、現場が「責任と権限」を与えられること。そして、課題への取り組み方を個人単位から「チーム」へと変え

看護部 部長 渡邊八重子

ること。すると、問題を解決する知恵を生む速度が上がり、「自ら問題点を発見し、解決する現場」ができる。こうした現場が努力をつづければ、必ず「成果」が生まれる。その間に「人」が育ち、「自信と誇り」を持てるようになる。「問題発見→解決」のPDCAサイクルを継続させる「エネルギー」も湧くと言っています。

今後も、“Local & Global”をめざし、医療を取り囲む環境変化に注目しながら“現場力”の向上を図り、「全ての人の幸福に貢献するために愛の心をもって常に最高水準の医療を提供し続ける」という使命を果たせるよう頑張っていきたいと思っています。

働きやすい環境づくり…そこからはじまる看護

看護部 業務担当副部長 秋葉一枝

医療の高度化・複雑化が進む中、患者さまのニーズも多様化しており、看護職に求められる役割や能力は拡大しています。そして、看護職の働き方も多様化しています。

患者さまの安全と質の高い医療を最優先に考え、

心を込めて寄り添うことのできる看護を目指し、その看護が実践できるよう、臨床現場のさまざまな業務環境を整えていきたいと思っています。人に寄り添い、スタッフに寄り添うことを大切にしていきたいです。

信頼と満足を得るために

看護部 教育担当副部長 安田友恵

亀田メディカルセンターの看護サービスとは、その担い手である看護スタッフが常にサービスを受ける人の傍らにあって、必要な援助をその最もあう方法と優れた技術で喜びをもって実践することです。

この実践のキーワードは、「患者さま中心」「QOLの向上」「信頼と満足」「保健・医療・福祉の統合、継

続的連携」です。この実現のために、混沌とする社会においてもその時々医療ニーズに対応できる看護職育成が必要です。そして看護職個々人が学び成長していくその先に、自分のキャリアを描き生き生きと笑顔で働けるような支援をしていきたいと思っています。

選ばれる病院

コロナ下のこの3年間、急激に変化した生活環境の中、チーム一丸となり協力し合い進んできました。今後も社会の変化に対応し、求められる組織となるように努めていきたいと思っています。

その結果、患者さまやそのご家族から選ばれる病

看護部 総務担当副部長 神作聖美

院となり、感動してもらえる関わりができたかと願います。そして職員の働きやすい施設・環境となるよう努力していきたいと考えています。

どうぞよろしくお願いいたします。

亀田ブランドを支える人材の確保と育成

看護部 人事担当副部長 池田晴美

2040年には日本の20～64歳人口が全体の半分にまで減少すると推計されています。本格的な人口減少が進む中、医療福祉分野では利用者数の急増に対して「担い手」の減少が懸念されており、人材確保と人材育成は最重要課題です。一人ひとりの職業能力開発、労働力の最適配置や雇用管理の改善等に

より働く人の潜在的な力を引き上げ、活躍できるようにしていくことが求められています。

長期的な展望に立ち、総合的な対策を迅速かつ柔軟に進めると共に、「亀田」で働きたい！」と願い、亀田ブランドを支える人材を皆様と一緒に育てていきたいと思っています。

CLOSE UP NEWS

クローズアップニュース

JCI 本社役員が来鴨

国際的病院評価機関「Joint Commission International」の本社から、Joel A. Roos国際認証および質改善・安全担当副社長と、John Yoonアジア太平洋担当責任者が10月5日(水)来院しました。

今回の来日目的は、JCIを取得した国内医療機関をまわり、JCIに対するヒアリングや、「日本医療機能評価機構」との協力体制についての意見交換を行うためであり、亀田隆明理事長をはじめとした経営陣と、品質管理部のアントニオ・シルバ・ペレス部長等との間で、継続して改善を行うことの重要性について活発な意見が交わされました。



JCIの審査員として40か国、300回以上の審査に携わるシルバ・ペレス部長は、「わざわざ鴨川までお越しいただいたのは、非常に名誉なことだと思っている。短い時間だが有意義な会だった。また日本医療機能評価機構との連携については、日本独自の診療報酬などJCIではカバーしきれない分野もあるため、同機構との連携によって知見を共有し、今以上に患者さまや働く職員にとって安全で、質の高い医療が提供できるようになれば」と感想を語りました。

血液・腫瘍内科が今年も快挙！ 米国血液学会の Abstract Achievement Award を受賞



血液・腫瘍内科の池田大輔医師が「Humoral Response to the Third-Dose COVID-19 Vaccination in Patients with Hematological Malignancy(血液腫瘍患者における新型コロナウイルスワクチン3回接種に対する応答性)」という題で提出した抄録が、米国血液学会の Abstract Achievement Awardを受賞しました。

研究は422名の血液腫瘍の患者をリンパ系・形質細胞系・骨髄細胞系の腫瘍グループに分け、ワクチンの2回目接種後と3回目接種後の抗体値を調べたもの。その結果、疾患に関わらず大部分の患者は3回目接種後に抗体価が上がったものの、リンパ系腫瘍の患者で特定の薬剤を使用する人は、抗体価が上がりにくいことが判明したことをまとめました。

海外では3回目接種があまり進んでいないことや、422名もの大規模な研究が珍しいことが今回の受賞の決め手となったのではないかと分析しつつも、「患者さまのご協力なくしてはできなかった研究。また検査室のスタッフや、患者さまのご家族にもご協力いただいた。この場を借りて深くお礼を申し上げたい。この研究を血液腫瘍の患者さまの感染症予防や治療に生かしていきたい」と抱負を語る一方で、「この研究はワクチン接種後の抗体産生以外の免疫反応は調べられていない。ワクチン接種に悩んだ場合は医師に相談してほしい」と呼びかけています。

論文を書くことや研究をすることは「楽しいのがんばれる」と笑顔を見せる池田医師。渡米して授賞式に参加する予定だそうです。

地元飲食店の味を手軽にテイクアウト

コロナ下で職員食堂の「密」を避ける、昼食メニューの選択肢を増やす目的で、2020年12月から鴨川事業所で始まったキッチンカーによるお弁当販売。地元飲食店の味が病院で手軽にテイクアウトできると人気です。

昨年10月からはA棟前に加えてG棟前でも提供がはじまり、ランチタイムには毎



日3~4店舗が日替わりで出店し、バラエティー豊かなお弁当を提供しています。なお、G棟前の出店店舗は夜9時まで通し営業(※無くなり次第終了)を行っているため、夕方になるとキッチンカーの灯りに誘われて、仕事帰りに立ち寄るスタッフや夕食を買い求める人など、病院周辺の夜を明るく彩っています。

痛みのトータルケア Web講演会



10月26日(水)、亀田総合病院Kタワー13階ホライゾンホールにて、「痛みのトータルケア Web講演会」が開催されました。

前半の教育講演では、疼痛・緩和ケア科部長の関根龍一医師が、「当院疼痛・緩和ケア外来における痛みの診療と今後の課題」について講演。年齢や疾患を問わず、痛みや苦痛のケアを必要とするすべての人に緩和医療の提供をめざす同科の考えや、がん患者さまの疼痛管理の近年の動向や、慢性疼痛患者さまに対しては他職種チームでアプローチすることの重要性などが提起されました。

続いて、麻酔科部長の吉沼裕美医師が「よりよい

術後疼痛を目指して」と題し、術前麻酔科外来やAPS(Acute Pain Service：術後疼痛管理)チームの活動を紹介。アンケート結果から手術にのぞむ多くの患者さまが「痛み」に不安を抱いていることが判明。術後管理で痛みを和らげることが患者さまの満足度向上につながると、今後のAPSの取り組みや展望を語りました。

後半の特別講演では、VR(Virtual Reality：仮想現実)技術を用いた治療の研究・開発や、日本ペインクリニック学会発行の「神経障害性疼痛薬物療法ガイドライン」の作成・執筆に携わった東京大学医学部附属病院 緩和ケア診療部部長 住谷昌彦准教授より、「神経障害性疼痛の現状と今後と展望」について講演いただき、盛会のうちに終了しました。

ヘルスツーリズム 看護師がモニター参加

南房総の豊かな自然環境を生かし、「健康」をテーマとした観光「ヘルスツーリズム」の商品化に取り組む南房総市観光協会では、新たに看護師を対象としたツアーを企画。10・11月の2回にわけてモニターツアーが行われ、当院から看護師17人が参加。コロナ下で疲弊した心身をリフレッシュしました。

このツアーは、観光庁の「地域独自の観光資源を活用した地域の稼げる看板商品の創出事業」として採択されたもので、自宅やオフィスなど日常生活の場を離れた「第三の場所」で、自分らしい時間を過ごすことが心の負担を減らし、ストレスの軽減につながるという考えに基づいたもの。一方、全国的な看護師不足とコロナによるストレスも加わり、看護の現場では、入職5、6年目の中堅看護師の支援が大

きな鍵となっています。そこで、モニターツアーでは単に癒しの体験だけでなく、キャリア教育を組み合わせたプログラムにできないか当院から要望し、今回のツアーが実現しました。

中堅看護師のキャリア支援に力を注ぐ教育担当の安田友恵副部長は、「プログラム終了後、参加者の表情はとても生き生きしていた。コロナ下での疲労を癒すと共に、自分自身を見つめ直す貴重な機会になったと思う。場所を変えて話し合う事の重要さに気づかされた」とヘルスツーリズムの効果に手応えをみせました。



オルカの浦島選手ベストイレブンに初選出！

サッカー選手と医療従事者の二足のわらじを履く「オルカ鴨川FC」(以下、オルカ鴨川)のキャプテン、MF・浦島里紗選手が「プレナスなでしこリーグ2022」のベストイレブンに初選出された功績をたたえ、11月21日(月)、理事長表彰が行われました。

浦島選手は関東学園大学卒業後の2017年にオルカ鴨川に入団。日中は当院臨床検査室で事務スタッフとして勤務しながら、サッカーを続けてきました。9月11日(日)に鴨川市陸上競技場で行われたASハリマアルビオンとのホームゲームでは、リーグ戦通算100試合出場を達成しました。

チームは、今季野田朱美氏を監督に迎え、グループ5位でシーズンを終了。コロナ下で練習、試合と

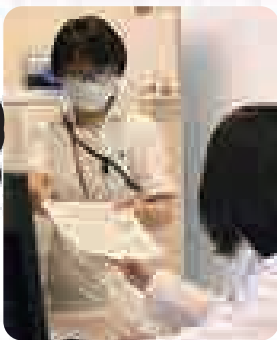
もにさまざまな制約があるなか、浦島選手はキャプテンとしてチームをまとめ上げてきました。

クラブ史上初、また自身初となったベストイレブン選出を受け、浦島選手は「今シーズンの目標の一つだったこともあり、またチームのみんなと戦った結果が実を結び大変励みになる。いつも応援してくださる職場の皆さまにも感謝の気持ちを伝えたい。来シーズンこそは優勝して表彰式の会場にチームメイト全員で立ちたい」と抱負を力強く語りました。



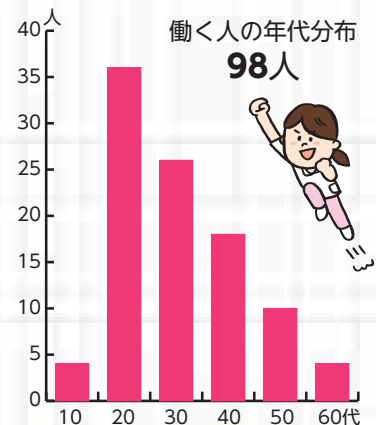


病院は 誰かの仕事で できている



今回の部署 PSR

PSR(Patient Service Representative: 患者サービスの代理人)は、亀田クリニックの患者さまが心地よく、より円滑に外来診療を受けていただけるよう、必要な援助を行う仕事です。業務内容は問診聴取・各種検査の説明・カルテから処置オーダー入力・診療サポートなど、多岐に渡ります。また患者さまにとって身近な存在として、病院との橋渡し役でもあります。現在では、第1と第2に別れ、計98人が働いています。比較的若い人が多い一方で、長く務めるベテランも多いのが特徴です。



お仕事のやりがいは？

外来診療がスムーズに行えるようサポートできた時や医師・看護師・患者さまより感謝された時

集中力が高くなり自分に自信を持つことができる



配属された担当科で先輩から学んだあと、自身で優先順位を考え行動する事で日々成長できる

能力を発揮する場があり、それを評価してもらえる環境があるため、やりがいを感じられる



臨機応変に自分で考えて動くことが大切なPSR。集中力が必要な一方で、円滑に診療がすすみ、患者さまや医師・看護師の「ありがとう」が聞けるのが醍醐味です。

大変だなと感じることは？

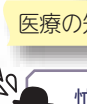
医療用語が難しい

患者さまから受けるクレーム対応

医師・患者さまの間の潤滑油とならなくてはいけないところ



“正しく伝える”ということがあたり前のように難しい。少しのニュアンスの違いで伝える側と受ける側ですれ違いが生じるので、伝えるって大変だと感じる



医療の知識がゼロの状態から仕事をしながら学んでいくこと



忙しいスタッフから指示を受けたり、体調が悪い患者さまの声を聞くことも多い仕事です。ミスや事故があってもならない職場だけに、知識・緊張感が必要です。

お仕事の魅力や選んだ理由など

医療関係の仕事に就きたかった

地域医療に貢献したいと思った

誰かの役に立ちたいと思い、この仕事を選んだ

医療関係でしか学ぶことができない資格や経験

医療専門の勉強をしていなくても、PSRとして活躍する人はたくさんいます。接客業など別業種の経験や、地域のために働きたいと思う気持ちが大切です。また医療の現場だからこそ学びのチャンスもたくさんあります。

コロナ下で きずなが強く

コロナ感染が拡がり、体調不良で休むスタッフが増え人員不足が続いていましたが、スタッフ1人1人が効率を考え行動し、協力し合うことで乗り越えてきました。ですから、私たちのチームの強みは「協力の精神」だと思います

仕事で1番 大切にしていること

仕事で1番大切にしていることは、「患者さまに寄り添った対応」をすることです。時間に追われる日々ですが、そんな中でも患者さまの不満や不安な表情を見逃さず、自ら声をかけ笑顔で帰っていただけるよう心がけています

日々勉強!!

- 仕事をしながら介護の勉強をしたこと
- 入職して10年がたちますが毎日たくさんのスタッフに支えられながら医師・看護師・患者さまより多くのことを学ばせていただいています。これからも感謝の気持ちを忘れずに日々成長できるよう仕事に専心していききたいと思います

PSR課のひみつを聞きました

①医師をそばで見ているので…

診療科や医師について詳しいPSR。「家族が病気になったら、どの科のどの先生にかかればよいのか相談できる環境が近くにある」。この情報は貴重ですよ。一家に一人はほしい頼もしい存在です。

②GOODな子育て環境!

30代の子育て中スタッフが多いのも特徴。認定こども園OURSを活用しつつ、パワフルに働いています。先輩ママが休憩時間に子育てアドバイスしているのもよく見かけるそうです!

③パワフル60代

60代も元気に活躍。長年の経験から行き届いたケアができたり、若い世代の頼もしい先輩たちです。

④血を見ても大丈夫??

採用面接で必ず聞く質問。医療の現場、特に外科領域では時としてショッキングな場面に立ち会うこともあるので、苦手な人は配属先を考慮するそうです。

⑤研修内容に自信アリ

チェックリストを使い、ひとつずつ丁寧に指導しています。目標は3か月で独り立ち。看護師さんを講師に急変時対応を学んだりもします。

・漢方

仕事もプライベートも毎日楽しく一生懸命頑張れるように東洋医学の先生に漢方を処方してもらい、心と体のベストなコンディションを保っています

・ウクレレ

平井大が好きでいつも通勤時に聴いて癒されています。いつか大ちゃんとセッションしたいと思い、ウクレレ教室に通い始めました。まだ騒音程度の腕前ですが頑張っています

SECRET



亀田総合病院報

No.271

亀田ホームページ <https://www.kameda.com>

2023年1月1日発行（隔月発行） 発行責任者：亀田隆明 編集：広報企画室

発行：医療法人鉄蕉会 〒296-8602 千葉県鴨川市栗町1929

当広報誌は個人情報保護のもと本人の了承を得て作成しており、本用途以外の転用は固くお断りしております。

All articles on this PR magazine has been printed under the permission of the subscriber to protect their personal information.

All editorial content and graphics may not be copied without the permission of Kameda Medical Center, Public Relations which reserves all rights.

